



# 発達支援における音・音楽を用いたコミュニケーションとことばの発達に関する研究：音楽の臨床的活用法に着目して

本郷, みか

---

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 19(2):1-11

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503490>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503490>



# 発達支援における音・音楽を用いたコミュニケーションと ことばの発達に関する研究 －音楽の臨床的活用法に着目して－

## Study of Communication and Language Development of Disabled Children with Special Needs -Focusing on Clinical Roles of Music-

本郷 みか\*

Mika HONGO\*

**要約：**発達支援が必要な子ども達にとって、音楽は自己表現の媒体、心理的安定、そして活動の動機づけとなり得るものである。本研究では、音楽の「臨床的活用法」に着目し、発達支援が必要な子どもたちの自己感の形成、コミュニケーションやことばの発達を促進する音楽的要素とアプローチについて検討した。音楽を用いて発達支援を行う際には、リズム、メロディ、ハーモニーなどの構造特性を理解し、「発達を促す音の使い方」や「情動的影響を企図した支援」を理解した上で行う必要があり、音楽の三要素や休符（間）の臨床的活用について検討した。音楽療法士や言語聴覚士の先行臨床事例を分析し、どのような音楽的要素が自己への気づきやコミュニケーション、言葉の発達を促進したかを明らかにした。「反復」「呼びかけと応答」「模倣と逆模倣」「同質の音楽の提供」など、12の特徴を抽出し、その効果と使用方法を検証した。

**キーワード：**発達支援、音楽療育、音楽療法、音の臨床的活用

### 1. はじめに

発達支援を必要とする子ども達は、自己と外界への認識が乏しく、意思の伝達や他者との円滑な意思疎通が困難な場合がある。このことから、家族や養育者が対応に苦慮する場面が多くみられる。感覚的知覚と運動能力の協応が困難であり、言語面では、理解言語や表出言語の遅れ、限られた発語と平坦な抑揚などの傾向も見られる。そのため、子ども達が発信するサインを理解し、やりとりを円滑にするコミュニケーションツールを双方が持ち合わせておくことが非常に重要である。

本研究において対象とする「発達支援を必要とする子ども」とは、主として未就学児を中心としつつ、年齢にかかわらず、発達やコミュニケーション、ことばの獲得に困難や偏りを示し、支援を必要とする子どもを想定している。

実践現場においては、神経発達症を有する子どもが多く含まれるが、診断の有無に限定せず、知的障

害、吃音、構音障害等、発達の課題により支援を必要とする場合も本研究の射程に含めている。

筆者はこれまで、心身に様々な障がいのある児童、生徒達と関わってきたが、日々の支援の中で、音楽がいかに、人と関わる力や言語表出が未発達な子ども達にとって、自己表現の媒体となり、心理的な安定、活動の動機づけとなるものであるかを実感した。このような子ども達の事象の背景には、音楽の様々な構造特性が働いており、これらを療育者が、意図的、計画的に使用する事により、子ども達は楽しみながら人と関わり、自らの発達課題や社会的困難を乗り越える事が出来るのではないかと考えた。

そして「どのような」音楽の要素を、「いかに」使う事（Okazaki, 2010）が、子ども達の心身の成長に必要な働きをもたらし、発達に関与するのか、音楽の持つ臨床的活用法に着目した。

本研究では、先行研究において指摘されてきた音楽的対話（沼田, 2022）<sup>1</sup>や同期（Synchronization

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

（2025年9月30日 受付）  
（2026年1月30日 受理）

=相手とのリズムやタイミングを共有する関わり)といった視点もふまえ、音・音楽の具体的な使用方法と子ども達の反応との関連を整理・検討する事を目的とする。

## 2. 発達を促進させる音楽に関する先行研究

本章では、発達支援を必要とする子どもを対象とした音・音楽を用いた支援に関する先行研究について整理する。具体的には、子どものことばや、社会的な成長を促すための効果的な音楽の使い方やアプローチに着目し、発達心理、音楽療法、障害児教育等の分野における先行研究をもとに検討し、音・音楽がどのようにコミュニケーションやことばの発達に関与しているのかを明らかにする。なお、本稿では、「音楽療法」と「音楽療育」という用語を、実践の目的および文脈の違いに配慮しつつ用いている。音楽療法とは、音楽を治療的媒体として用い、対象者の心理的・身体的・社会的側面に働きかける専門的実践を指す。一方、音楽療育とは、発達支援や教育的文脈において音や音楽を活用し、子どもの発達段階や特性に応じた経験を積み重ねることにより、コミュニケーションやことばの発達、情動調整等を支援する実践を指す。実践現場においては、両者が重なり合いながら用いられる場合も多く、本研究では両者を厳密に区別するのではなく、文脈に応じて使い分ける立場をとる。

子ども達のコミュニケーションやことばの発達は、脳内の情緒や言語機能だけではなく、運動や視覚・聴覚・触覚といった体性感覚を含む多様なシステムの連携に支えられている。こうした多層的な発達の仕組みを理解する枠組みとして、Williams & Shellenberger (1996) が示した「発達のピラミッド (Pyramid of Learning)」が有用である。

発達のピラミッドは、子どもの学びや社会性の発達が、感覚処理や運動機能といった基盤の上に積み重なって形成される事を示すモデルである。最下層には前庭覚・固有感覚・触覚といった感覚システム、その上に姿勢制御や両側協応などの知覚運動機能が築かれる。さらに視知覚・注意機能などの認知スキルを経て、最上位に学習や社会性が成立する。音楽は、この発達ピラミッドの下層から上層までを橋渡しし、発達を支える実践的手法として有効であると考えられる。リズムや拍の体験は前庭覚や固有感覚を刺激し、姿勢制御や運動企画を促進する(タウト, 2011)。打楽器演奏や身体表現、リズム活動などは、身体の両側協応やタイミング調整を自然に引き出し、基盤的な運動スキルの獲得に寄与する。また、音楽に伴う聴覚刺激やマルチモーダルな経験は、注意機能や感情調整を支援し、情動の安定化や対人関係の基盤づくりに役立つ(Wigram, Pedersen, &

Bonde, 2002)。さらに、歌唱や即興演奏は、言語的・非言語的なコミュニケーションを促進し、視知覚・聴覚処理やワーキングメモリといった認知機能を包括的に刺激する(Rickson & McFerran, 2014)。

このように、音楽は感覚・運動から認知・社会性に至る発達階層の各段階に働きかけ、「発達のピラミッド」を積み上げる重要な役割を担っていると考えられる。

〔中枢神経からの発達のピラミッド〕

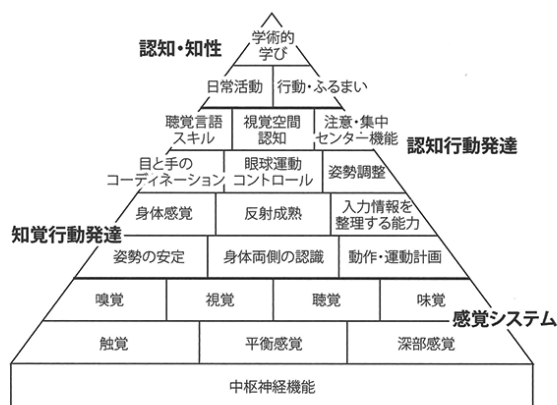


図1 Williams & Shellenberger (1996) による中枢神経からの発達のピラミッド (森本・山本, 2016 より引用)

子どもの発達は感覚・運動から認知・社会性へと積み上がる多層的なプロセスによって支えられているが、それをさらに保障するのが「人との関わり」である。音楽は、感覚や運動の媒介として発達を支えるだけでなく、他者との関係性の中でその働きが一層深まる。とりわけ周囲の大人との愛着が形成される事で、人に対する信頼感が育まれ、自発的な行動や発語の基盤となる。やまだ (2010) は、「ことばが生まれるためには、自分が見たもの体験したものを他者に伝えたい、分かち合いたいという強力な欲求と、それを支える人間関係が必要である」と指摘し、前言語的・非言語的な行動を含む広範な生活文脈の中で、ことばを捉える必要性を述べている。

ここから、発達支援における音や音楽を用いたコミュニケーションやことばの発達に関する先行研究を概観していく。

Gross et al. (2010) は、発達が遅れている幼児を対象に、音楽療法を受けた子どもと受けない子どもの言語や行動パターンの発達尺度を比較し、音楽が人との関係性を築く能力や発音(韻律、抑揚)の能力など、多くの異なる側面を包括的に扱い、統合する可能性がある事を示した。他者との相互的な関係が築きにくい障がいを持った子ども達にとって、音楽的な快い交流は、外界への気づき、周囲との相互的な人間関係や愛着関係を築く事を助け、訓練的にならずに間接的にことばを獲得する過程を辿ること

を示唆している。柿崎（2010, 2011, 2016, 2017）や、ケリー（2023）は、感覚統合療法を取り入れた音楽的療法の多くの活動例や症例を示し、非言語コミュニケーションや動機づけ、多重感覚刺激の提供の効果を示している。

加藤（2000）は身体への働きかけを中心とした音楽活動により、対人意識が高められ、コミュニケーションの基盤である「同期（Synchronization）」と「模倣」が生じた事を明らかにしている。同期とは、音楽が聞こえると自然と身体が揺れたり、人が音楽に反応しているのを見ると、自分の身体が動きに合ってくる現象を指す。音楽活動の中で同期を繰り返す事は、他者との共感を経験する事であり、それがコミュニケーション、会話の基盤である「模倣」につながる（タウト、2011；根岸、2019）。

コミュニケーションとことばの発達に特化した音楽療法に関する臨床事例研究では、障害児の言語指導において音楽の反応別アプローチを検討したもの（松原・高田、1997）、自閉傾向を持つ発達遅滞児への外界への気づきと言語発達のための音楽療法（鎌倉、2000）、自閉スペクトラム症児のことばの発達を促す音楽的アプローチ（大岩ら、2000）、音楽活動によって他者意識を獲得したことばの未熟な子どもの行動の変化（野村、2002）、歌を中心とした関わりで対人相互反応が生まれた事例（浜田、2004）、言語理解と表出の促進を試みた、歌いかけ活動の考察（中澤ら、2009）などがある。言語聴覚士によるものでは、音楽を利用した発達障害幼児の言語指導（今井、1994）、音楽療法場面での言語獲得と運動の関係（近藤、2019）、音楽療法と言語療法の連携による検討（長岡・宍戸、1994；Geist et al., 2008）などがあげられる。

即興演奏を主体とした音楽療法士 Nordoff & Robbins の創造的音楽療法においても、障害のある子ども達のコミュニケーションやことばの発達を促す音楽の臨床的活用を複合的に使用した例が見られ、音楽の臨床的活用法と発達の関係性を解明する上で意義深い。『創造的音楽療法曲集 こどものためのプレイソング（曲：ノードフ、P・詞：ロビンズ、C、日本語テキスト：日本ノードフ＝ロビンズ音楽療法士の会、1999）』において、彼らは、子どもたちに多くの情緒的体験をさせるという目的で、5度以上の音域の開いた和声づけや、主要三和音以外の副7の和音を使用し、音に幅や豊かさを加える事を提言した。彼らの楽曲には、子ども達の「自己覚知」という目的で意図的に不協和音を用い、反応や表現を誘い出すための休符の多用、交互にフレーズを歌う交唱の形式が多く見られる。また、言葉の意味深さや明瞭な言語表現の価値を高めるために、歌詞のリズムと話し言葉のリズムが同じである事が重要であ

ると指摘し、歌詞が言葉の自然な抑揚やアクセントに沿って音楽がつけられているかどうかを吟味して選曲する必要性を示している。ボクシル（2003）は、歌う事が出来ない、自発的に歌わない者にとって、他者が歌う、という行為は内部感覚を刺激し、身体的、情動的、精神的な覚識を呼び起こし、話す事や理解力、精神と身体との統合への道となる、と述べ、歌うという感覚的な経験が、最もエレメンタルな水準のものであっても、自己の覚識と、何かを為しているという覚識（Awareness of Doing）を活性化することを示唆している。

上記の事例には、歌唱を伴った身体表現、とりわけ、音声、身体模倣を含むものが多数含まれている。さらに、ことばの発達のために必要な「身体性」との関係について、ボクシル（2003）は、諸感覚を刺激する事で、「精神－身体」は、深い筋肉感覚によって動きを記憶している一つの表現手段をとる事により、身体活動を伴った音楽が、子どもの学習に対する受容性と可能性を高めるのを助けている、と示唆している。

人間の「身体」「動き」「感情」とは、互いに深く関わり合い影響しあっており、さらに音楽が加わるとその変化は強化されると考えられる（頼、1996；師井、1997）。

脳科学的な視点からの言及では、能動的に音楽と関わる事は、模倣、協調を促し、ミラーニューロンと重なる脳領域が使われるので、自閉スペクトラム症児（者）のコミュニケーション能力改善に効果があると考えられる（Wan et al., 2010）。

特に自閉スペクトラム症児は言語賞賛されるよりも模倣してもらう方が（逆模倣）、他者に注目すると言われ、逆模倣は「他者理解」に繋がる可能性がある、と、米山（2021）は示唆している。

谷村（2010）は、「身体模倣は他者が行ったことを自分に置き換えて行うことであり、対人関係の発達と関連しながら自己像の表現形態として現われ、人の関係性、身体への発達にとって重要である」と述べている。乳幼児と養育者の相互交渉では、言語や動作の模倣的関わりと共に、子どもに代わって言語化する「代弁」が、コミュニケーションの発達に重要であると指摘されている（伊藤・結城、2013；岡本、2014）。

これらの見解から、人は模倣される事により自分を他者に投影する事が出来、他者の行動を意識し、自己への気づき（自己感）が促されると考えられる。次章では、自己と他者への意識が未熟で相互行為が成立しにくい対象児への音楽療法セッション事例を抽出し、自己感の成立、コミュニケーションやことばの発達に効果的であったアプローチと、児童の反応、変化等の事例を表1に示し、音楽の臨床的活用

法や、心理的、身体的な関わり、またそれらによって生起し達成され得ると考えられる発達の変容について述べる。なお、表1に示した先行研究は、音・音楽を用いた発達支援およびコミュニケーション・ことばの発達に関する文献を収集したものである。文献収集は、大学図書館の蔵書検索および学術文献データベース（CiNii Articles, Web of Science, Google Scholar, 医中誌 等）を用い、「発達支援」「ことばの発達」「コミュニケーションの発達」「音楽療法」等のキーワードにより検索を行った。さらに、抽出された主要文献の参考文献リストを辿る方法を用いて関連文献を追加的に収集し、音・音楽の具体的な使用方法と対象児の反応や変化が記載されている研究を中心に整理した。

### 3. 先行研究の考察

本章では、第2章で整理した先行研究をもとに、コミュニケーションおよびことばの発達に関与すると考えられる音楽の使用方法や臨床的活用法について考察する。具体的には、表1に示した各研究・事例に記載された音・音楽の特徴、臨床的意図、および対象児の反応や変化に着目し、共通性の高い要素を抽出した。その結果、事例レベルで整理可能な使用音楽の特徴および臨床的活用法として9項目を導出し、さらにそれらを横断的に比較・整理する事で、表2に示す「コミュニケーション・ことばの発達を促したとみられる音楽の特徴」として12項目を整理した。

#### (1) 使用音楽の特徴及び臨床的活用法

##### ・構造、旋律と和声のシンプルな音楽

各事例において使われている音楽の特徴には、音楽の始動と静止の解りやすい構造、モノフォニックなテクスチュア、規則性のあるリズムの反復、繰り返しのメロディ（A-B-A形式）、声のみの歌いかけ、3音、5音のメロディの即興曲など、シンプルなものが多かった。Ilari & Sundara (2009) は、乳児は、声だけの歌いかけの方が、伴奏のある歌いかけよりも好まれる事を明らかにしている。これは、発達が未熟な子どもにとって、人間の声は注意を惹きつける魅力をもった音であり、よりシンプルな刺激を好む事などが理由として考えられる。子どもは聞きやすいパターンの音を自ら選択して聞いており、そこから歌詞や音楽の特徴を掴みとろうとしていく事が、示唆される（梶川, 2014）。

・導音の使用（旋律や和声進行における）

松原・高田（1997）の事例では、歌の中で導音を多用した和音を提示したところ、視線を向け、身体を緊張させ音に聞き入るといった反応が見られ、音への気づきや意識がもたらされた。岡崎（1996）、横内・

眞田（2013）が述べているように、ハーモニーの不協和音（不安）―協和音（安心）の対比は、情動を調整し、心理的、身体的な緊張と弛緩がもたらされたと示唆される。また、カデンツ進行における音のパターンは、「予測→期待→達成」という快い知覚反応と脳の報酬をもたらす、ドーパミン分泌が促進されるとZatorre et al. (2013) は明らかにしている。I - V - I の様な、始めから終わりへの明確な方向性を持つ音楽パターンは、終結する際、聴く者に解決感と達成感がもたらされ、行動を完了する誘因となるため、身体的反応が引き起こされやすいと考えられる。

##### ・未解決→解決による音楽の完結性

松原・高田（1997）の事例で、曲が中断したところで、児童の要求の発声や動作が引き出されたのは、土野（2006）の言う、間を埋めようとする「音楽の完結性」を活用している。人の「間」や不足の部分を解決したいという衝動、「未解決→解決」の音を達成する事により満足感が得られるという未解決技法（松井, 1998）の現象には、ホメオスターシスが働いていると土野（2006）、柿崎（2017）は示唆している。また、歌のフレーズのパターン（掛け合いの直前で音を静止→発声・反応を待つ→再開）を繰り返した経験から、音楽を続けて欲しい時は、要求の発声、動作を行う、という行動が学習されたと捉えられる。鎌倉（2000）の事例で、呼びかけの名前の最後の1音を発語しない方法で児童からの発語を促す、という関わりも、未解決技法の作用が働いたとみられる。いつも大人から名前を呼ばれる受動的な体験から、自分で自分の名前を発するという能動的な置き換えによって、相手との役割交差が生まれたと推測する。また、下川・田坂（2010）の事例でも、音楽とセラピーボールの揺れを故意に止め、「じらし」を作る事で「間」の特性を巧みに取り入れ、要求語を引き出している。音への気づき、外界刺激の受容は、コミュニケーションの入口であると言える。

##### ・終止感のない音楽

高山（2000）の事例では、“Ur Song”<sup>2</sup>（人類に与えられた根源的な歌）と呼ばれる、「G・E・A」の音を中心とした母音唱の対話的なやりとり、また教会旋法のメロディによって、少女の自己像の形成や協調性が促された事が示されている。

「G・E・A」は日本のわらべ歌をはじめ、世界中の子どもの歌の原形である。情緒の不安定な少女にとって3つの構造化された音が象徴的な音として受容され、自由に表現しやすい「枠」を作り出したものと考えられる。

一般的な全音階は導音、属7の7音のような限定進行が存在し秩序性を持ち強制力があるが、終止感のない教会旋法（5音音階）は和声的に解放された

表 1 コミュニケーションとことばの発達を促した音・音楽の使い方および対象児の反応・変化

| 先行研究            | 対象児                                                 | アプローチ                                                                                                                                   | 使用楽器・教材<br>使用曲                                                                                 | 対象児の反応・変化                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------|-----------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 松原・高田<br>(1997) | 外界刺激の受容や反応が未熟な児童                                    | ・接拶の歌に導音を多用した和音を提示、その後のつも通りのメロディを提供<br>・聞き慣れた歌のフレーズの最後の音、歌詞が掛け合いになっている部分の直前で曲を止め、続きを期待する児が何か発声や動作をしたら曲を続ける                              | ピアノ<br>・あいさつの歌                                                                                 | ・ピアノに視線を向け身体を緊張させる、その後、いつものメロディが聞こえるとリラックス、笑顔が出る（緊張と弛緩の体験から音への気づきをもたらした）<br>・「あれっ」という表情や動きを期待するような表情や動きを見せる<br>・パターンを繰り返すことにより要求の動作、発声を引き出した<br>・発声頻度が増加しフレーズの切り方や抑揚がセラピストのメロディラインに一致<br>・セラピストとアイコンタクトをしながら歌う<br>・曲の終止で「あれー？」という発声（始まりと終りの意識）<br>・動作とともに次第にしっかりとした発声、正確な発音が可能となった |
|                 | 重度MR(精神遅滞)児童<br>注視行動や模倣行動が定着していない<br>・有声音がほとんど出ない児童 | ・曲に合わせて身体を揺らす児に対し、身体の内揺れや声のトーン、抑揚に合わせて一緒に声を出し、本人が歌っている感覚を持たせ、発声を誘導する<br>・児の身体のリズムや好む動作に合わせた動きに発声を伴わせてゆく<br>・大きくはつきりとした動作をしながら発声するモデルを示す | ・お気に入りの歌<br>・不快なリズムの提供                                                                         | ※声を出す事の経験が少ない児童に対しては動きと共に思わず声が出たという効果が出やすく発声行動が定着しやすい。セラピストの動きに興味を持ち集中が持続しやすい                                                                                                                                                                                                      |
| 高山<br>(200)     | 自己表現の方法に制約がある少女                                     | ・言葉として内容を持たない、G、E、Aの音を中心とした母音唱、教会旋法の即興で非言的なやりとり<br>・歌で名前が登場する直前にrit.をかけた期待感を増長<br>・馴染みの曲のテーマから即興へ（同調、応答、延長、犯行速度の変化等、遊びの成立）              | ピアノ、ソリーチャイム、スタンボンバル<br>・児の名前が登場する歌<br>・教会旋法の即興<br>・「即興曲」風のものって」<br>・お花がわらった」                   | ・音楽に応答するような声の発声、声の表情の変化<br>・自分の意志で楽器を選ぶ<br>・自分の名前前で傾いて待つようになり、呼ばれた直後に「あー」という応答<br>・自己意識、自発的な表現の高まり、理解言語の増大<br>・ラボールの成立、心の容量増加、情緒の安定や自傷行為の減少という効果が現れた                                                                                                                               |
| 鎌倉<br>(2000)    | 自己像の形成が未発達な自閉傾向のある児童                                | ・接拶の歌の中で、手を握り（固有感覚の入力）、児童に口形を示してゆくり発語し、名前の語尾の一音を発音しない方法で、名前の発語を促す<br>・歌唱活動にクイズのやりとりを盛り込み、ペーズサートの使用による、視覚刺激の入力、パターンのような言語のやりとりの中で賞賛を受ける  | ピアノ、タンブラリン、鈴、スネアドラム、ハンブドラム、ペーザサート<br>・握手をしようよ」<br>・握手でこんにちは」<br>・あててみてごらん」<br>・失当たりの歌」         | ・外界への気づき、呼びかけに対する挙手が見られた<br>・自分の名前の愛称を1音ずつ区切って答えた<br>・自発語、要求語の出現、言葉のやりとりを獲得<br>・発語に関する自信やコミュニケーションの意欲が育った                                                                                                                                                                          |
| 野村<br>(2000)    | 自閉を伴う精神発達遅滞のある児童                                    | ・動きに音楽の速さ、音量合わせた同質の音楽の提供<br>・曲のテンポに沿った身体の内揺れの誘導<br>・始動、制止の解りやすい構造音楽の提供<br>・対面で歌いながら楽器を鳴らし合う、向かい合う空間作り                                   | キーボード、ギター、タンブラリン、バーチャイム、フラインガーシンバル、アラカス、太鼓、トランポリン<br>・あいうえお星さま」<br>・きよならの歌」                    | ・音楽の変化に合わせた動きが増加<br>・大人を見る機会、活動時間の増加、楽器や歌への興味が増加<br>・始まりと終わりの意識が見られた<br>・活動の要求など積極的な行動の出現（自らThに近づきフラインガーシンバルを鳴らす）<br>・興味の拡大、コミュニケーションの促進<br>・歌詞の一部の発語                                                                                                                              |
| 中澤ら<br>(2002)   | 言葉による総合的やり取りが苦手な知的に遅れがある児童                          | ・児の声の高さに合わせ既知の歌を交互唱<br>・歌詞の動詞と身体動作が一致した歌の歌いかけ<br>・規則的に最後のフレーズを繰り返す構造に編曲した曲の歌いかけ<br>例：シャボン玉 飛んだ 飛んだ 飛んだ<br>(繰り返しの歌いかけ)                   | ピアノ、Gボール、トランポリン、絵カード、スプーン、コップ等の実物<br>・矢くくア」<br>・「〇ちゃん立つ」<br>・「〇ちゃんが食べる」といった歌いかけの反復<br>・「しゃぼん玉」 | ・歌詞を繰り返して歌い、歌に合わせて身体を動かすなど模唱を行った<br>・言葉（動詞）への気づき<br>・言語コミュニケーションへの気づきが促され、言語理解、言語表出が促進された                                                                                                                                                                                          |

|                 |                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-----------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 小川<br>(2004)    | 自己刺激が多く外界が捉えにくい、重度の精神発達遅滞児                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・フレーズの終わりの音価を伸ばし声を重ね合う<br/>例： ギャびびこさーん</li> <li>・声だけの歌いかけ(音刺激の整理)</li> <li>・発声後、自己刺激の停止→アイコンタクトを待つ<br/>てから次のフレーズを歌う</li> <li>・セラピストが体を大きく動かし、息を吸う動作を示してから歌い出す</li> <li>・伸ばしている音に時々強弱変化をつけ、児童の声の強弱や発音の模倣などを取り入れた発声</li> </ul>                                                | タム、太鼓、ギヤザリソング<br>ドラム、シンバル、ホイッスル、トライアングル、ピアノ、シャボン玉                                                                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・次のフレーズを予測し、期待するアイコンタクト（曲の構造理解）が生まれた</li> <li>・要求後の増加、自発的な音程や強弱の変化が見られた</li> <li>・声を重ね合うことで他者と楽しむ様子が見られた（外界への積極的な働きかけ）</li> <li>・楽器操作においても目と動作の高次化や要求行動がみられるようになった</li> </ul>                                                                                                                             |
| 松崎<br>(2010)    | 先天性正門狭鼻症で気管切開をしている児童                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・即興を中心とした音楽活動</li> <li>・リクエストソングに応じる歌唱活動</li> <li>・呼吸吸気とも音が鳴るクワイヤーホーンでのやり取り</li> <li>・休符と休符の間にラッパを鳴らす構造の曲の提供</li> </ul>                                                                                                                                                     | 銅鑼、クワイヤーホーン、リードホーン、スライドホイッスル<br>・リクエストソング<br>※ABA 三部形式楽曲<br>A＝ホーン、B＝チャレレンジ、A＝再びホーンに戻るという母子関係と重なり音楽の形式が児童の心理的な影響にも繋がったと松崎は示唆 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・口を動かして歌うような口形模倣</li> <li>・音楽のダイナミクスを感じながら「大きく」「長く」息をコントロールしてラッパを鳴らす様子が見られた</li> <li>・呼吸での発語がみられるようになった</li> </ul> <div>           ※脳科学者茂木(2010)は、人間の脳内にあるミラーニューロンの反応特性は、相手の行為を見た時にあたかも自分がしているかのようなシミュレーションを実行することが可能であるという知見を示し、発声が音声として表出されなくても 歌唱活動を通して内言語が増す過程において、児の声帯は動いているのではないかと示唆         </div> |
| 下川・田坂<br>(2010) | 発語がほとんどない広汎性発達障児                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・セラピーボールを揺らして発声の促しに重点を置く（前庭感覚の提供）</li> <li>・揺れに音楽を合わせ声や楽器でのやりとり</li> <li>・音楽とボールの揺れを故意に止め、要求語を促す</li> <li>・今、目に見えているもの(桜がきれいな等)の即興歌を歌い共同注意や指差しを促す</li> </ul>                                                                                                                | 楽器(記載なし)、セラピーボール<br>・即興歌                                                                                                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・要求のサインの表出</li> <li>・返事、擬声語の出現、指差し</li> <li>・初頭語「さー(桜)」「つー(つばめ)」等の出現</li> <li>・他者との気持ちや関係を表す言葉（「一緒」「大丈夫」など）出現</li> </ul> <div>           ※セラピーボールは重力を抵抗にしてその抵抗を声にするという訓練になり、足を踏ん張ることで声が出やすくなるので発声の為に必要な共鳴腔としての体作りに適した活動である(田坂 2010)         </div>                                                        |
| 岡崎<br>(2017)    | 言葉を他者とのやりとりの手段として使用することが難しい、発声における抑振が平穏な自閉症児童 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・5音階メロディで声のやりとりをし、抑振の幅（音程の感覚）や方向（上昇・下降）を徐々に拡充し発声に合わせてピアノや声で即興し徐々に展開し「思わず声を出してしまった」という状況の設定</li> <li>・どの歌を歌っても失敗しない5音階の枠を設定</li> <li>・児の発声の模倣や新しいアイディアのモデルソング</li> <li>・メロディのコール&amp;レスポンスの音楽的構造提示</li> <li>・お互いが異なるアイディアでやり取りし会話のような場面を増やし、思わず歌いたくなるようなホームページの提供</li> </ul> | ピアノ、打楽器、オートハープ<br>・メロディ楽器の即興                                                                                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・歌声の抑振が広がりバリエーションが増え感情が込められた発声に変化していった</li> <li>・劣等感を持つことなく発声することができ自由な歌声に変化していった</li> <li>・発声における表現の拡充が、日常生活の言語的やりとりにおける感情のニュアンスも、増加させることができた</li> </ul>                                                                                                                                                 |

特性を持っており、少女の心理的抑圧を解放し、セラピストとの快い音楽的共感との相互作用から自由な表現が見出されたと思われる。岡崎（2017）の事例では、即興で5音音階を用いたアプローチを試み、児童の発声における感情のニュアンスを拡充させていったが、先述した5音音階は、和声的な解放感を与えるだけでなく、「どの音を弾いても、歌ってもハーモニーが成立し、失敗がない」という特性がある。児童の発声や表現を、より美的なものとしてセラピストがフィードバック、展開していく事で自分を肯定的に受け止める事が出来、5音音階の安全な音楽的構造の中で自由な発声が生まれたと考えられる。

### ・音楽+多感覚刺激

鎌倉（2000）の事例では、歌いかけと同時に、握手、児童の手首を揺らす事により、固有感覚へ刺激を入れた。歌に合わせた、握る、揺らすという多感覚へのアプローチが外界意識と興味をもたらしたと考えられる。

また、ペープサート活動は絵本に比べ、動かす、選ぶ、渡す、一部分だけ隠して提示するという自由度の高い性質により興味を引き出しやすく、追視を促し、視覚及び聴覚、複数感覚の意図的な組み合わせによる情報伝達媒体としてコミュニケーションに優れた性質を持っていることから、療育に多く取り入れられている。またクイズの正解時に賞賛するような効果音を用いたことにより、集中力や活動への意欲が向上し発語への自信がもたらされたと思われる。

下川・田坂(2010)の事例では、児童をセラピーボールの上に乗せてセッションが行われたが、セラピーボールは、平衡感覚や深部感覚などの体性感覚を育むのに効果的で、子どもの好きな刺激である。宇佐川（2007）は、このような感覚運動の指導について、「最初は運動によって漠然とした空間・順序を認識していくが、その際、音楽や教材教具が活用される事により、聴覚運動協応活動や視覚運動協応活動となり、こうした活動を通して聴き取る力、見分ける力が高まり、表層が育っていく」と述べている。人や物という環境が理解出来る事で、安定した関わりが生まれ、自分の意志や感情を表す発声が出現したと思われる。

### ・身体運動を伴う音楽

中澤ら（2009）の事例では、行う動作に直結した歌詞（立つ、座る、歩く、飲むなど）を含んだ楽曲の、歌いかけ活動で、児童の言語的自己感や表現を促進させた。実際に動作を伴う事で視覚的なイメージとことばが結びついた事は明らかである。岡本(1982)は、言語理解において、動詞と動作を直結させる事の重要性を述べており、また齋藤（2007）は、歌詞

と動詞が一致したリズム同期の自作曲によって、児童の積極的な反応が見られた特別支援学校での音楽活動の効果を紹介している。

### ・模倣と反復

中澤ら（2009）のセッションでは、童謡（しゃばんだま）を、最後のフレーズの歌詞（飛んだ〜）と、リズムパターンを繰り返す構造に編曲した事から、特定の音韻形態（音と響きが意味するもの）と特定の動作や動き（意味されるもの）が関連付けられ、言語理解、言語表出が促進されたと考えられる。

小川の事例で、重度の発達障害を持つ児童は、最初は発声や呼気のコントロールを自己刺激の道具としていたが、他者の歌声（声のみ）による介入で、外界への気づきがもたらされた。さらに歌声のフレーズの最終音に自身の声を重ねるという曲の構造理解（フレーズの輪郭の知覚）がなされ、アイコンタクトやセラピストへの積極的な働きかけが表れた。反復することに関してRobbins（1998）は、発達に遅れのある子どもにとって仲間に何回も歌いかけける事は、彼らに自信を持たせる事が出来、歌詞を覚えて仲間同士のコミュニケーションに意味が生まれる、と、子ども達に満足感を与えることが出来る、と反復の効果を示している。

### ・音楽の発展

岡崎（2017）の事例では、児童の音や声の模倣、新しいアイディアのモデリング、コール&レスポンスの提示等の関わりを通して、お互いが異なるアイディアで音楽を交わし、児童が表現した音楽を発展させていった。セラピストが自身を受容してくれたという認識が生まれ、二者の関係と音楽の関係の質がより促進されたものと思われる。

ブルシア（2020）は、「即興演奏における『組み入れ』は、クライアントのモチーフを少し変えたり、発展させたり、誇張したりすることがある点で模倣以上のものである」と述べている。コール&レスポンスはクライアントの持っているテンポやリズムの特徴を把握し、その時々感情を即座に表現していく一種の「かけひき」であるが、音楽的会話の成立は、日常生活においても、コミュニケーション、対話の基盤となると考えられる。

### ・同質の音楽

野村（2002）は、児童の表情、身ぶり、素振り、行動などの前言語的な表現に着目し、児童の身体の動きに音楽の速さや音量を合わせた同質の音楽の提供し、予測しやすい構造の繰り返しの中で、自発的な発声を引き出し相互的なやりとりを構築させた。パターン化されたメロディや、シンプルなりズムで繰り返す歌いかけに、聴覚の高次化が行われ、自己刺激で遮断していた内的な世界から、声の重ね合いで他者とやりとりをするといった遊び、表現が生ま

れたと考えられる。また、静と動の身体の動きが、徐々に音楽のムードやリズムに同調した頃に、構成やテンポを急に異質なものに変えた事が他者認識の契機となったと野村は考察している（前述の「音楽の発展」とも共通する）。

ブルシア（2020）は、同調から変化を導入するこの技法について、ダイログで話題を変えるのと同じであり、反芻することに逆らう試みである、と述べている。特に、パターンに固執しやすい自閉スペクトラム症児にとって、多様な音楽の変化に気づき、受容、対応が出来る事は環境への柔軟な対応と人間関係の構築にも繋がると考えられる。

## (2) 発達を促したとみられる音楽の特徴

先行研究の考察から、コミュニケーション、ことばの発達を促したとみられる音楽の特徴を表2にまとめる。

表1の事例の中で、セラピスト達は、表2にあげたこれらの音楽的特徴を、生理的・心理的・身体的企図をもって計画的に活用し、子ども達のコンテクストに応じて、メロディ、歌詞、伴奏、間のとり方、アプローチなどを、工夫、翻案していた。各音楽療法セッションの中では、セラピストとクライアントの「あいだ」に音楽的な対話が生まれていた。

筆者は特に、各セラピスト達がもたらした音楽を臨床的に用いる事により生まれた、音楽的対話と同期の力に着目した。

## 4. 総合考察

本章では、第2章および第3章で整理した先行研究の知見をふまえ、音・音楽を用いた関わりが、子どものコミュニケーションおよびことばの発達にどのように関与しているのかについて総合的に考察する。本研究で取り上げた音楽的対話や同期は、先行研究においてもその重要性が指摘されてきた概念であるが、本研究の学術的貢献は、これらの概念を新たに提示することを目的とするのではなく、音・音楽の具体的な使用方法と対象児の反応との関連に着目し、臨床実践の視点から横断的に整理した点にある。

音楽を用いてノンバーバルコミュニケーションを充実させる事は、遊びながら活動に没頭し、「思わず声が出た」「身体の動きが誘発された」という心理及び身体現象に大きく寄与すると考えられる。そのような関わりを積み重ねる事によって、子ども達は自らの発達課題を困難なく遊びながら超えることが可能となり、他者への関心、関わりの欲求、コミュニケーション、自己表現などの発達現象に変化をもたらす事が期待できる。

表2 コミュニケーション・ことばの発達を促したとみられる音楽の特徴

- ① 構造、メロディや歌詞がシンプルなもの
- ② 反復を含み記憶に残りやすいもの
- ③ 先の展開の予測を可能にし、他者と声や動作を合わせやすいパターンのあるもの
- ④ 動作、音声の模倣、逆模倣を伴うもの
- ⑤ リズムの変化やテンポの緩急があり情動に働きかけるもの
- ⑥ 視覚的にイメージを高めやすいもの
- ⑦ 曲が中断した所で発声や要求を誘うもの
- ⑧ 未解決→解決の音型で、満足感や達成感を味わえるもの
- ⑨ コール&レスポンスの応答が含まれているもの
- ⑩ 全音階の調性の枠のない5音音階を含むもの
- ⑪ 感覚刺激や身体運動を伴うもの
- ⑫ 即興演奏によるクライアントの状態と同質の音楽

音の変化を聴き分けていく能力を高めることは、自分の表出する音、声やことばをよりの確に認知し、自己と外界に気づき、その中から自分に必要な情報を選択する、聴く力の獲得につながるものと考えられる。

音のやりとりで対話を創造していく技法は、発声、発語が未熟な対象者であっても成立し、心が通い合えたという実感をもたらす体験になる。また、楽器をことばの代行手段としても活用できる。

この音楽的対話は、自分自身への気づきや認識を発達させるための強力なツールであり、外界と自己の分化、相手と合わせる調整能力、交互に主体をとる、というコミュニケーションの基本スキルを促す機会となり、社会的つながりを強化する事が明らかにされた。

音楽的なインタラクションがセラピストとの共鳴的な関係を通じて、自己の一貫性や統合性が強化される可能性については、臨床的にも理論的にも重要

な示唆が得られた。

また、2章でも述べたように、「同期」とは、音楽が聞こえると自然に身体が揺れたり、他者の動きに自らの身体が同調していく現象であり、共感や模倣、コミュニケーションの基盤となる（タウト、2011；根岸、2019）。

本研究において観察された同期は、単なる身体的同調にとどまらず、拍の安定や律動の流れの中で生まれる揺らぎ、そして相手との間合いの中で生じる共鳴によって支えられていた。子どもはリズムの繰り返しに身を委ねながら、自らの声や動きを相手に響かせ、相手の応答を受け取る事で、音楽的な「響き合い」の体験を重ねていた。

このように、拍・律動・間合いに伴う揺らぎと共鳴は、即興的な発声やことば遊びを豊かにし、模倣や応答の循環を促進した。それは子ども達にとって、他者と「共にいる」事を実感する場となり、安心感と関係性の深化をもたらした。

以上から、同期は単なるリズムの一致ではなく、音楽的に響き合う関係性の中で発達を支える臨床的資源として重要であることが示された。

## 5. 今後の課題と展望

最後に、音楽を臨床的に用いる際の視点について述べる。子ども達との相互関係性の中で重要な事は、音楽を媒介として子ども達と養育者との相互関係性の質を高める事であり、そこから生まれる音の質こそ、子ども達にとって変容をもたらし得る意味のあるものであると考える。子ども達の嗜好、発達段階や行動を十分に把握した上で、コミュニケーションの拡がりを目指す音楽活動を展開していく事が必要である。

本論で紹介した事例によると、子ども達とセラピスト達との交流の中で生じたのは、生きた音楽であった。音楽がみずみずしさを失えば、子ども達の心とことばの発達を育む栄養としての役割は果たされず、臨床的活用法もその役割を十分に果たすことはできない。大人が子ども達と共に響き合うプロセスで生まれる表現の本質を見つめ、音・音楽の質を高めていく事ができれば、子ども達のことばの芽が芽吹くための豊かな土壌となり得るであろう。

音楽行為は、人と繋がり、関わり合おうとする相互作用の中にその意味があると考えため、療育者と子ども達との関係性や、その過程で生起し、展開する音楽的、言語的介入や音楽的要素についても、引き続き検討していく必要がある。

本稿では、先行研究をもとに、ことばの生成プロセスについて検討し、障がいのある子ども達のコミュニケーションとことばの発達を促す様々な音楽の臨床的活用法について述べた。音楽による療育は

非常に多面的であり、スキルや能力の獲得、行動の変容のみを目標とする訓練ではなく、音楽の機能を効果的に用いる療法的技法であるといえる。

技術のみならず、常にその土台にあったのは、青柳（2015）が述べる、「ことば」を「人が、人や世界に関わるその最中に新たに生まれてくる『生もの』として捉える視界」である。

しかしながら、本研究は主に理論的考察に基づくものであり、実証的研究が不足している点が課題として挙げられる。今後は、質的ケーススタディによる詳細な事例分析や、対照群を設定した介入研究など、研究目的に応じたデザインを用いることにより、音・音楽を用いた関わりが発達支援を必要とする子ども達にどのような影響を及ぼすのかを検討していく事が求められる。

また、評価指標としては、言語発達尺度、共同注意、対人相互作用の変化などを多面的に捉える指標を組み合わせて用いる事で、コミュニケーションやことばの発達に関する変容をより具体的に検討できると考えられる。

さらに、神経科学、発達心理学、音楽療法の知見を往還させながら検討を重ねる事で、音・音楽を用いた臨床実践の意義を、より包括的に捉える事が可能になるだろう。

本研究を基に、音・音楽・声・身体がどのように子ども達の表現を育み、コミュニケーションやことばの発達に影響を与えるのかを精査し、今後、発達を促進する効果的な音楽療育プログラムの考案を目指していきたい。

## 【注】

- 1「音楽的対話」（沼田、2022）とは、言語のみならず声・音・身体の動きを媒介として、セラピストと対象者が即興的に相互作用を行う過程を指す。その特徴は、非言語的表現の重視、即興性と共創の重視、相互の表現の尊重、さらに音・身体・言語を重層的に活用する点にある。
- 2“Ur Song”とは、レナードバンスタインが、人類の発生論的遺産と音楽的調和を決定する物理的法則の両方の産物と定義した考え方であり、「G・E・A（ソミラ）」の音例は世界中の子どもの歌の原形というべきものである（高山、2000）。

## 【引用・参考文献】

- 青柳宏（2015）：「ことばを育むために：M.メルロ＝ポンティの初期言語論の視界から」『宇都宮大学教育学部紀要』第1部、第65号、pp.1-15.
- ボクシル、E.H.（2003）：林庸二・稲田雅美訳「発達障害児のための音楽療法」人間と歴史社（Boxill,E.H.（1985）：Music Therapy for the

- Developmentally Disabled*. PRO-ED, Inc.)
- ブルシア, K.E. (2020): 林庸二・岡崎香奈ほか訳「即興音楽療法の諸理論(下)」人間と歴史社 (Bruscia, K.E. (1987): *Improvisational Models of Music Therapy*. Charles C Thomas, Publisher.)
- Geist, K., McCarthy, J., & Rodgers-Smith. (2008): Integrating Music Therapy Services and Speech-Language Therapy Services for Children with Severe Communication Impairments: A Co-Treatment Model. *Journal of Instructional Psychology*, 35, pp. 311-316.
- Gross, W. & Linden, U. & Ostermann, T. (2010): Effects of Music Therapy in the Treatment of Children with Delayed Speech Development - Results of a Pilot Study. *BMC Complementary Medicine and Therapies*. DOI:10.1186/1472-6882-10-39.
- 浜田優子 (2004): 「ある自閉症児の歌唱活動における歌の意義 - 対人的反応が生まれた A 児のセッションより - (批評: 遠山文吉)」『音楽療法研究』第 14 号, pp.33-39.
- Ilari, B., & Sundara, M. (2009): Music Listening Preferences in Early Life Infants' Responses to Accompanied Versus Unaccompanied Singing. *Journal of Research in Music Education*, 56, pp.357-369.
- 今井常晶 (1994): 「音楽療法・音楽活動を利用した発達障害幼児の言語指導 - S T からの音楽療法へ提案 -」『音楽療法研究』第 4 号, pp.75-82.
- 伊藤良子・結城みやこ (2013): 「自閉症スペクトラム児のコミュニケーション行動に及ぼす mirroring の効果」『発達心理学研究』第 25 号, pp.23-27.
- 梶川祥世 (2014) 赤ちゃんに聞かせる音楽. ON-KENSCOPE.2014, [https://www.yamaha-mf.or.jp/onkenscope/kajikawasachiyol\\_chapter3/](https://www.yamaha-mf.or.jp/onkenscope/kajikawasachiyol_chapter3/) (2022.1.20 参照)
- ケリー, L.S. 2023 土田玲子監修 花岡清美・柿崎次子訳「シンプルソングで楽しい療育」Amazon KDP
- (Kelly, L.S. (2020): *Simple Songs, Functional Fun Music*. Independently published.)
- 柿崎次子 (2010): 「音楽療法における音楽の非言語コミュニケーションについての一考察」『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』第 43 号, pp. 45-56.
- 柿崎次子 (2011): 「感覚統合理論を生かした音楽療法の指 - 実践を通して -」『くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要』第 44 号, pp. 39-48.
- 柿崎次子 (2016): 感覚統合を活かして子どもを伸ばす! 音楽療法 苦手に寄り添う楽しい音楽活動 明治図書出版
- 柿崎次子 (2017): 「音楽療法の特性とその学際的活用」『大和大学研究紀要 第 3 巻保健医療学部編』pp.11-13.
- 加藤博之 (2000): 「特殊学級における多動児の対人意識を高める試み - 小集団音楽活動における身体への働きかけを中心に -」『特殊教育学研究』第 37 号, pp.33-39.
- 鎌倉賀子 (2000): 「事例研究 自閉傾向を持つ発達遅滞児への音楽療法—外界への気づきと言語発達のためのアプローチ」『音楽療法研究』第 5 号, pp.74-82.
- 近藤裕美 (2019): 「言語獲得と運動との関係 (特集 これからの音楽療法: 療育の視点から)」『難病と在宅ケア』第 25 号, pp.21-24.
- 松原まゆみ・高田早苗・松浦彰子 (1997): 「障害児の為の音楽による言語指導 - 音楽への反応別によるアプローチ」『音楽療法研究』第 2 号, pp. 70-75.
- 茂木健一郎 (2001): 『心を生みだす脳のシステム「私」というミステリー』NHK 出版
- 森本貴義・山本邦子 (2016): 伸びる子どもの、からだのつくり方—「かけっこ一番」をめざす前に、知っておきたい 60 のこと ポプラ社, pp.84-85.
- 師井和子 (1997): 「高齢者の音楽療法に於ける動きの役割と効果」『音楽療法研究』第 4 号, pp.13-16.
- 長岡恵理・宍戸ゆかり (1994): 「特殊学級における音楽療法と言語療法の連携—A 君の事例を通して—」『音楽療法研究』第 4 号, pp.83-87.
- 中澤恵・伊藤啓子・深野広美 (2009): 「【音楽療法のケーススタディ】言語理解, 言語表出の促進を試みた障害児への音楽療法 歌いかけの活動の考察」『日本音楽療法学会誌』第 9 号, pp.27-35.
- 根岸由香 (2019): 『つながる音楽 社会性を育てる 75 のインクルーシブな音楽活動』あおぞら音楽社
- 日本ノードフ = ロビンス音楽療法士の会 (1996): 『創造的音楽療法曲集: 子どものためのプレイソング』音楽之友社
- ノードフ, P. & ロビンス, C. (1998): 林庸二 (監訳) 望月薫・岡崎香奈 (訳) 「障害児教育におけるグループ音楽療法」人間と歴史社 (Nordoff, P. & Robbins, C. (1983): *Music Therapy for Special Education*, MMB Music Inc.)

- 沼田里衣 (2022) : 「音とことばによる対話に関する臨床音楽学研究 : 「おとあそび工房」における試みから」『アートミーツケア』第 13 号, pp.1-16
- 野村裕子 (2002) : 「ことばの遅れた子どもと音楽療法 : 音楽の活動によって芽生えた行動の変化」『聴能言語学研究』第 19 号, pp. 47-50.
- 小川美奈子 (2004) : 「声の重ね合いによる外界の拡がり - 重度精神発達遅滞児の事例 -」『音楽療法研究』第 14 号, pp.25-32.
- 大岩みどり・山本悠美子・益子務 (2000) : 「自閉症児のことばの発達を促す音楽的アプローチ」『音楽療法研究』第 5 号, pp. 36-44.
- 岡本夏木 (1982) : 『こどもとことば』 pp.169-170. 岩波新書
- 岡本依子 (2014) : 「親はどのように乳児とコミュニケーションするか : 前言語の親子コミュニケーションにおける代弁の機能」『発達心理学研究』第 25 号, pp.23-27.
- Okazaki, K. (2010) : The Clinical Use of Musical Components and their Impact in Improvisational Music Therapy. Doctoral Dissertation, New York University.
- 岡崎香奈 (1996) : 若尾裕・岡崎香奈『音楽療法のためのハンドブック』音楽之友社.
- 岡崎香奈 (2017) : 「発達と音楽 : 音楽療法的視点からの考察 (特集 発達とは何か)」『神戸大学大院人間発達環境学研究科研究紀要』第 10 号 pp.35-41.
- 頼恭子 (1996) : 「幼児期における聴取活動あり方 - リトミック, コダーイ, オルフの音楽教育より探る」『武蔵野音楽大学研究紀要』第 28 号, pp.203-218.
- Rickson, D., & McFerran, K. (2014) . *Creating Music Cultures in the Schools: A Perspective from Community Music Therapy*. Barcelona Publishers
- 齋藤一雄 (2007) : 「知的障害養護学校小学部におけるリズム同期のための自作曲の活用」『上越教育大学教育学部附属障害児教育実践センター紀要』第 13 巻 pp.33-39.
- 下川英子・田坂和子 (2010) : 「MT+ST 対談 まず伝えたい気持ちを育む」『The ミュージックセラピー』音楽之友社
- タウト, M.H. (2011) 『リズム, 音楽, 脳 新版—神経学的音楽療法の科学的根拠と臨床応用』三好恒明訳, 協同医書出版社 (Thaut, M. H. (2015) : *Rhythm, Music, and the Brain: Scientific Foundations and Clinical Applications of Neurologic Music Therapy*. Taylor & Francis Group, LLC.)
- 高山仁 (2000) : 「“UrSong (普遍的な歌)” による「声」を用いた音楽療法」『音楽療法研究』第 5 号, pp.83-89.
- 竹内貞一 (2015) : 「子どもの発達と音楽」『子ども・子育て支援 研究センター年報』第 4 号, pp.79-87.
- 谷村宏子 (2010) : 「自閉症児にみられる音楽行動の変容 - 乳幼児音楽行動の発達プロセススケールの作成を通して」『保育学研究』第 48 号, pp.10-22.
- 土野研治 (2006) : 『声・身体・コミュニケーション - 障害児の音楽療法 -』春秋社
- 宇佐川浩 (2007) : 『障害児の発達臨床 (2) 感覚と運動の高次化から見た子ども理解』学苑社
- Wan, C.Y., Demaine, K., & Zipse, L., Norton, A., & Schlaug, G. (2010) : From Music Making to Speaking: Engaging the Mirror Neuron System in Autism. *Brain Research Bulletin*, 82, pp.161-168.
- Wigram, T., Pedersen, I. N., & Bonde, L. O. (2002) : *A Comprehensive Guide to Music Therapy: Theory, Clinical Practice, Research and Training*. Jessica Kingsley Publishers.
- Williams, M. S., & Shellenberger, S. (1996) : *How Does Your Engine Run? A Leader's Guide to the Alert Program for self-regulation*. Therapy Works Inc.
- やまだようこ (2010) : 『ことばの前のことば うたうコミュニケーション』新曜社
- 横内理絵・眞田敏 (2013) : 「音楽が情動におよぼす影響と音楽的行動の発達—広汎性発達障害児に対する音楽を用いた支援のための知見—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第 3 巻, pp.10-16.
- 米山直樹 (2021) : 「発達障害のある子供への行動的支援について—言語・コミュニケーション訓練を中心に」『日本ことば療学会講演資料』
- Zatorre, R.J. & Salimpoor, V.N. (2013) : From Perception to Pleasure: Music and its Neural Substrates : *PNAS (Proceedings of the National Academy of Sciences)*